

## 「ことばの理解」に関して思うこと

氏 家 洋 子

多分、ファイトにあふれる、と言っている友人（Ａ）がいる。それは生気にみちた、ということでもあり、更に彼女がしばしば好戦的に私の目に映るということからこの語が許されるのではないかと思う。

ところで、学部の時、専攻が同じだったことで行動を共にしていた友人（Ｂ）から私自身この語で表現されたことがある。当時の私は机の上の勉強のことしか頭になく、土・日曜は学会をみつけてはでかけていた。彼女にも同様の価値観があったが、私の関心がそれに集中されていたのに対し、彼女はもう少し幅広く人間社会に興味をもっていた。そのために、私の生活態度を評して彼女はこの語を使ったのである。しかし、私にしてみれば、自分の実情とは程遠い。それで、

「あら、へんね。好きなことするのにファイトがいるかしら。たとえば映画が好きな人がよく映画に行くのにファイトがあるって言う？」

彼女は一瞬黙り、後に

「じゃ、バイタリティーね。」と言ひ直した。

自分にそんなものがあるのかどうか思ってみたこともなかったが、とにかくファイトという語を彼女が撤回したので私は一応黙った。それほどまでにこのファイトという語は自分から速く、その故にか自分にその語をあてはめられると断固として否と言わざるを得なかった。

彼女がその語を使ったのは、学会・講演会に行くことに對して一定の価値観を持ちながらも、ほかのことにも興味があり、前者を選びたい気持があり乍らも後者の力に支配され、しかもそれに徹し切れないという所にある時、常に前者を選ぶ私がそばにいたということからであったのだろう。人を評した語が自分自身を語ることとはよくあることだから。

この語につながる地点にあると思われるものに「くやしい」という語がある。

ある情況が、私としては困惑から絶望に通じるものであることを人に説明した折、終りに私は自分なりの決意（？）を

「でも私、何とかするわ。」

と、そう言ったことがある。その時、相手に

「そうね、くやしいものね。」

と言われて、一瞬とまどったことがある。

「くやしい」という感情を表わす語はそれまで私の身近に存在しなかった。この相手が、最初にあげた友人(A)であるが、この語を耳にして、彼女の言動の今まではっきりと私にはとらえ難く、名付け難かったものの正体が忽然と現われたような思いがした。彼女にファイトを感じるというのもこれと同一線上でのことである。

が、結果的にそう整理できるまでには時間が必要だった。というのは「くやしい」という感じ方・発想の仕方が私にはまるでなかったからである。他人とせり合い、闘う中で思うようにいかなかった時、多分この語は出るものであろう。私はまるで闘っていなかった。

4.5年前に、ある生命力溢れる友人(C)に

「あなたはいつも1番でなけり+気が済まないんでしよ。」

と言われて啞然としたことがある。何人かの仲間の前で、それは抗議的な調子で語られた。

「そんなこと、考えたことがない……。第一、私は他人のことなんて意識してないわよ。」

と答えるしかなかった。

私は人と熾烈に闘ったことがない。もし闘わなければならないような場合には私は身を引く。

しかし、最近あることを切望した。そして、その願いを実現するために自分の生活のベースの中で一定の努力をした。そんな時、もし願いが実現されていたら大変具合よくいくある事が起った。が、私の努力はまだ実っていなかった。望みが希望でなく切望であり続けていたため、私はそれが達せられないことで「ある気持」をもった。それは歯がみのしたいようなものであり、この時、「あ、これが『くやしい』に通じるものなのか」と思った。それはけんめいに闘った人のみの感じる敗北感なのか、と。だが、その「ある気持」をもう少しみつめていくと、だらしのない自分自身に対する口惜しさであることに気付いた。そして、

同時に、「くやしい」という感情が依然として私の内なるものでないということにも。

私は他人と闘うという形での社会性を獲得していない。他人とぶつかったらとっさには一歩身を引くという形でしか社会性を身につけていない。

人間の権利を侵害しているとか不正だとかと考えられるものにたちむかい、敗北しても、その時私が感じるものは憤りとか、本当は敗北していないという形のものである。もしかしたら、「いつか必ず……」という思い、現実よりも未来に思いを走らせるという精神傾向が私に強く、それが「くやしい」を理解させないでいるのだろうか。

そしてそのことは私がいつも他人との闘いを拒否していることに通じている。現実を生きるということは社会の中で生きることであり、人との闘いがそこには含まれる。そうであるのに、それがもし自分に強制でもされようものなら激しい屈辱感を感じるほどに私は他人との感情の闘いを回避するのである。

私は一人の個人でありたい。もし、引きずり出されて筋書通りに動けと言われたら、私は絶望感の淵からどんな無器用な舞を舞い始めることだろう。

同じ共同体内に生まれ育ちながら、理解がその全員の間で成立つものではないということを感じるのである。

人の言葉を言葉として理解することと、その表現に盛られた内容がわかるということとは違うことであるから。

(語研・専任講師) 7 3. 1. 2 8